

パラリンピックの政治、経済、社会及び 文化的意義

小倉和夫

(日本財団パラリンピック研究会)

パラリンピックは、障害者スポーツの国際大会である以上、当然、障害者スポーツの振興にその本来の意義があると言える。しかし、一歩踏み込んで、障害者スポーツの振興の意義とは何か、どこが健常者のスポーツ振興の意義と同じであり、どこが違うのかについては、必ずしも自明とは言えない。

例えば、健常者におけるスポーツ振興は、通常、健康の維持、スポーツを通じての精神的訓練や教育、ひいては社会開発や経済発展、地域開発などへの触媒としての機能に意義があるとみなされている。また、多くのスポーツが職業化・商業化しているため、かなりのスポーツは1つの産業としての要素を多分に持つようになってきている。

しかしながら、障害者スポーツのほとんど全ては、職業化・商業化していないのみならず、障害の克服やリハビリの一環としての活動が歴史的には多かったため、その社会的、経済的意義は、障害者の社会参加の奨励、障害者への社会的理解の深化といった、いわゆる「包摂 (inclusion)」機能にあるとする考えに基づいてきた傾向がある。

こうした見方は、パラリンピックの歴史の初期の段階では当然視されていた感があるが、パラリンピックの競技種目が増え、選手の競技能力が向上し、国際的なスポーツイベントとして注目されるようになればなるほど、疑問を持たれるようになってきた。

これは、障害者であれ健常者であれ、高度の競技スポーツに従事する選手は同じスポーツ選手として扱い、障害があることをもって特別扱いすべきではないとする考え方が強まったことを意味していた。

確かに現代社会においては、一般人のスポーツ活動と高度の訓練を経た人々による競技スポーツの社会的、経済的意義が違ってきており、パラリンピックの意義を考える際にもそうした点への考慮が必要となってきた。

加えて、パラリンピックとオリンピックの「融合」がいろいろな面で進み、それに伴って、パラリンピックが1つの国際的「イベント」として注目されるようになった結果、パラリンピックの政治的、経済的、社会的、文化的意義を考えるにあたって、パラリ

ンピックを単に「障害者スポーツ大会」として考えるのではなく、一大国際イベントとして、その効果やインパクトを考えるべき時期に来ていると言える。

こうした考慮から、本稿においては、パラリンピックの意義を、政治的、経済的、社会的、文化的意義、そして、スポーツ振興上の意義に分け、さらに、政治的意義については、政治的意義（インプリケーション）と関連法制および組織の整備に分けて考えることとした。また、スポーツ振興上の意義については、障害者スポーツ振興へのインパクト、選手、観客への影響の3つの側面から考察することとした。

1. 政治的意義

(1) 国内及び国際政治上の意味

パラリンピックの原点を探って行けば、1948年7月に英国ロンドン郊外のストークマンデビルで開かれた障害者スポーツ大会にさかのぼることができる。この大会の参加者のほとんどは、第2次世界大戦で脊髄に損傷を負った兵士たちのリハビリセンターであったストークマンデビル病院で治療を受けていた人々であり、しかも、この施設の責任者で、身体障害者のリハビリにスポーツを導入することに熱心であったグットマン博士は、ナチスドイツのユダヤ人迫害を逃れて英国に移住したユダヤ系ドイツ人であった¹⁾。グットマンは、1947年から *The Cord* という雑誌を発行していたが、この雑誌は傷病兵の肉体的・精神的リハビリのためのものであり、スポーツ活動もそうしたグットマンの活動の一部であった²⁾。

このように、パラリンピックの原点は、第2次世界大戦及び戦後の「復興」と密接に結びついていた。言い換えれば、戦争という「障害の原因」、並びに、そこからの立ち直りの過程とパラリンピックの原点とは、密接に結び付いていたのである。

こうして英国で始まった障害者スポーツ大会が、国際大会として英国以外の選手の正式参加を見たのは、オランダが参加した1952年の大会からであった。この後、大会はストークマンデビル国際大会と称されるようになり、1972年のハイデルベルク大会まで、これが正式名称として用いられた（従って、1964年の東京パラリンピック大会も、正式には第13回ストークマンデビル国際大会であった）。

こうした発祥の経緯を反映して、当初、ストークマンデビル国際大会の参加国は、当時の英連邦諸国や第2次世界大戦で英国の同盟国であった諸国に限られ、ドイツの参加は1954年、イタリアはその更に2年後の大会からである。また、1959年の第8回国際大会でも、インドとパキスタン以外はすべて欧米諸国であった³⁾。

こうした戦争との関連は、日本の場合にもある程度あてはまる。すなわち、1964年の

東京パラリンピック大会に参加した選手の中には、第2次世界大戦の傷痍軍人がいた⁴⁾。また、そもそも1964年東京オリンピック大会は、一旦決まっていた1941年東京大会を戦争のため返上せねばならなかった日本の、国際社会への全面的復帰と「戦後の終わり」を象徴するものであった。しかもオリンピック招致の動きは、1950年代半ば、日本がようやく第2次世界大戦の傷痕から復興しようとする時期に始まったものであり、その意味でも、1964年大会は第2次世界大戦と見えない糸で結ばれていたのである。

また、1970年代において、ベトナム戦争の傷病兵のリハビリの一環としてスキーやクロスカントリーが注目され、選手が輩出される契機となったとも言われている⁵⁾。現在でも、例えばロンドン・パラリンピック大会に出場した英国や米国の選手の中には中東での戦争での負傷者が含まれており⁶⁾、また、内戦で負傷した経験を持つ開発途上国からの参加者もいたとみられる。戦争とパラリンピックのつながりは、今日に至っても消えてはいない。

しかしながら、戦争とパラリンピックが見えない糸で結ばれていることは、近年では言及されないことが多い。一部にはむしろ、その関係をなるべく表に出さないよう努める風潮すらある。例えば、ロンドン・パラリンピック大会のPRビデオの場面に、戦乱の情景を入れ込むことの是非については、国際パラリンピック委員会と英国のPR会社との間にかかなりの議論があったと言われている⁷⁾。戦争とのつながりはパラリンピックのイメージを損ないかねないものとして、とかく言及を避ける傾向が一部に見られるが⁸⁾、客観的事実としての両者の関係をいたずらに覆い隠そうとすることは、かえってパラリンピックのイメージを傷つけかねないであろう。

いずれにしてもパラリンピックは、いろいろな意味での戦争の傷跡からの復興のシンボルとして政治的意味を持ち、またそれだけに、平和の大切さを人々に印象づける触媒ともなりうると言えよう。

この点とも関連して、パラリンピックの政治的意義の1つとして、災害との関連も無視できない。すなわち、戦争で負傷した人々のリハビリ活動を盛り上げるのと同じように、災害の被災者の精神的リハビリに、パラリンピックの持つ「力」を活用しようという側面である。例えば、北京パラリンピック大会は、2008年5月12日に生じた四川省地震の数カ月後に行われたこともあって、4人の被災者が聖火ランナーに選ばれたが、そのうちの1人は地震によって肢体を切断された人であった。そうしたランナーの参画は、人々が復興への力を得る一助となったと言われている⁹⁾。

他方、パラリンピックが国際的行事として注目されるようになるにつれて、大会を機会に特定国が何らかの「政治外交的」メッセージを国際社会へ発信する機会としてこれを活用する例も見られるようになった。

例えば、2012年のロンドン・パラリンピック大会に、北朝鮮は大会史上はじめて選手1人（水泳）を送り込んだが、開会式の際、その選手の傍らでいわば「選手団長」として国旗を掲げて行進した女性は、北朝鮮障害者体育協会の書記長であり、且つ、かつての卓球世界選手権大会で結成された南北朝鮮統一チームの一員であった。北朝鮮はこうした行為によって、障害者問題への自国の取り組みを国際社会へアピールするとともに、朝鮮統一に対する自らの信念を間接的に印象づけようとしたのであった¹⁰⁾。

加えて、パラリンピック大会で国際的に共通の政治的課題とみなされている事柄が、近年ではオリンピックと同様に、大なり小なり注目を浴びるようになってきている。例えば、女性の参加問題などが例として挙げられよう。今後、いわゆる「LGBT問題」なども、オリンピック同様、ある種の「政治問題」として議論されることもあり得よう。

他方、パラリンピック大会が特定の政治問題を際立たせる機会として、利用あるいは悪用されること自体に対して、これを政治の不当な介入とみなして（選手が）抗議するという、通常とは別の形でパラリンピックが「政治色」を帯びることもありうることに注意を要しよう。

なお、パラリンピック大会は、各種の障害者が幅広く、且つ国際的に参画するだけに、「障害者」のアイデンティティーを国際的に確立する好機となると言える。その一方、障害者スポーツを障害者の活動として見ず、あくまでスポーツとして見るという最近の傾向に照らせば、パラリンピック大会が障害者の国際的アイデンティティーの確立に役立つと言えるか否かについては、微妙な問題が残る¹¹⁾。

(2) 法制及び組織の整備

① 法制整備

パラリンピックの効果、遺産、あるいは社会的意義のうち、実証的に検証しやすいことの1つに、法制整備がある。オリンピック大会を契機として、障害者に関する法律が、大会ホスト国によって整備されることがあるからだ。

1つの例は、ソウル・パラリンピック大会である。韓国では、1980年にすでに障害者福祉法が制定されていたが、1988年のパラリンピック大会を契機として、1989年、法律がカバーする障害者の範囲を広げ、障害者の登録制度をさらに整備する法改正が行われた。これは、パラリンピック大会を契機として障害者対策に対する社会的意識が高まったことを反映したものとされている¹²⁾。

ここにはおそらく、2つの側面があったものと見られる。1つは、障害者対策への社会的関心の高まりという側面である。同時に、従来とかく障害者はなるべく表に出ないように、といった障害者自身あるいはその近親者の心理に、パラリンピック大会が新し

い見方を与えるきっかけとなった側面があったものと考えられる。

また、2014年のソチ冬季オリンピック招致に成功したロシアは、2008年10月、障害者について国際パラリンピック委員会（IPC）の基準を国内で適用するとの趣旨の法律を議会に上程したが、これはまさに、オリンピック招致がホスト国のスポーツ及び障害者対策関連法制にインパクトを与えた好例と言えよう¹³⁾。

日本自身についてみると、1964年の東京パラリンピック大会が1つの大きな契機となって、それまで介護、保護という観点から規定されていた身体障害者福祉法が、1967年、障害者の自立を支援する方向へ転換したことが挙げられる¹⁴⁾。

また、長野パラリンピック大会関連として、地方における法制整備も注目すべきであろう。例えば、招致の決定後、大会開催までの準備段階にあった1995年に、「長野県福祉まちづくり条例」が施行された。この条例によって、一定以上の新築、増築の建造物にあっては、障害者への配慮の有無について整備状況を届けなければならないこととなったのであった¹⁵⁾。

なお、法制整備の一環として、障害者国際条約への参加も挙げるができる。例えば、中国は2008年にこの国際条約を批准したが、これは、北京パラリンピック大会が1つの契機となったものと言えよう。

② 組織整備

法制度と並んで、障害者関連組織の整備の問題がある。

これには当然、国際的側面、すなわちIPC自体や国際競技団体の組織的整備の問題があるが、ホスト国における組織整備に目を向けると、例えばオランダが挙げられよう。1980年のパラリンピック大会は、オリンピック主催国のソ連邦が、ソ連には障害者はいない¹⁶⁾と言い、モスクワでのパラリンピック開催を拒否したこともあって、オランダのアーネムで行われることとなったが、開催決定を契機として、1977年にオランダは、障害者五輪基金を設立し、その後の障害者スポーツ振興の良き触媒となった¹⁷⁾。

また、日本の障害者スポーツ協会は、1964年の東京パラリンピック大会を契機として設立されたことが想起されよう。同じような例としては、韓国が1988年のソウル・パラリンピック大会の後に韓国障害者厚生スポーツ協会を立ち上げたことが挙げられる¹⁸⁾。更に、1996年のアトランタ大会の後、障害者スポーツ振興を組織的に行う団体として、「ブレイズ・スポーツ」が地方も含めて結成されたが、これもアトランタ・パラリンピック大会の「遺産」の1つと言えよう¹⁹⁾。

ここでも、地方レベルでの組織整備も見逃すべきではない。長野パラリンピック大会に際しアルペンスキーの会場に決まった山ノ内町で、早くも1994年に「やさしいまちづ

くり推進協議会」が立ち上げられ、役場庁舎のドアの自動開閉などいくつかの措置の推進にイニシアティブがとられた²⁰⁾。

2. 経済的意義

パラリンピックの創設者とも呼ばれるグットマン会長は、東京パラリンピック大会の後に開かれた国際シンポジウム²¹⁾で、次のような例を紹介している。

(パラリンピックにおける) 障害者選手の活躍、忍耐力、そしてその水準は、日本政府、民間の組織や雇用主に特別のインスピレーションを与え、脊髄損傷者の社会や産業界への再帰を助けようとしている。五輪終了後、6か月以内に、カメラや通信機器を製造する工場が多数存在する地区で、東京の西70マイルほどの場所に、56人の脊髄損傷者を雇用する、日本で初めての脊髄損傷者専用の長野工場が建てられた。

オリンピックと異なりパラリンピックの場合、経済効果についての詳細な数量的分析がなされているケースはほとんどないが、長野パラリンピック大会について、長野県関係者が計測した結果²²⁾によれば、大会運営費用約55億円の付加価値誘発額は約29億円、選手や観客の消費約89億円の付加価値誘発額は約64億円とされており、係数としては前者が約55%、後者が約72%程度となる。これを長野オリンピック大会の付加価値誘発効果の係数(運営費用については約163%、観客や選手の消費については約76%)と比較すると、パラリンピックにおいては運営費用の誘発効果が著しく低いことがわかる。これは恐らく、パラリンピック大会の運営が公的機関やボランティアによって行われ、商業的要素が少なかったためと考えられる。

また、経済効果については雇用への影響がよく云々されるが、長野パラリンピック大会の場合、観客等の消費及び運営費用(投資)の合計約144億円に対して、雇用誘発効果は1,202人であったとされる²³⁾。なお、障害者雇用面への効果としては、職業訓練の充実や雇用斡旋の問題がある。長野パラリンピック大会を契機に、1998年春に松本市に障害者のための職業訓練施設や障害者雇用支援センターが設立されたことが挙げられよう²⁴⁾。

なお、障害者雇用については、パラリンピックの効果のみならずオリンピック事業における障害者雇用の促進という側面も考えられる。この点につき、ロンドン・オリンピック大会のオリンピックパークの建設にあたり、建設に従事する契約労働者の約3%を障害者とするとの目標をたてていたことが注目される²⁵⁾。

さらに、経済面でのインパクトの一環として、技術開発や技術普及への影響がある。

第1に、使用する用具の開発に伴う技術開発、あるいは活用がある。例えば、2008年の北京パラリンピック大会では、アルミより軽くかつ空気抵抗の少ない素材の炭素繊維で作られた車椅子が初めて陸上競技に登場した²⁶⁾。

輸送面での開発・普及も無視できない。1998年の長野パラリンピック大会の準備過程で、日本自動車工業会は福祉車両の普及組織を作ったが、その結果、1997年の福祉用特殊車両の販売台数は、前年と比べ5割以上増加した²⁷⁾。

また、近年重要性を増しているのは情報技術面の開発・普及である。例えば、選手やコーチの間で試合中に的確に情報を共有する「タイムランチャー」というシステムが、バンクーバー大会を機に開発された²⁸⁾。

選手やコーチのための技術開発は、試合そのものに関するものばかりではなく、練習のためのものにも注目すべきである。例えば、2014年のソチ・パラリンピック大会でクロスカントリー競技に出場することとなった選手を抱えた企業は、大学と連携して、ソチの競技場の映像を映しながら屋内でローラースキーを使用して練習できる装置を開発したと言われている²⁹⁾。

より広い社会的な活用をめざした情報技術開発の例としては、長野パラリンピック大会を契機に信州大学が開発した「高齢者、難聴者のためのテレビ視聴中における通信システム」（電話やベルなどの音をテレビ画面上に視覚化するもの）³⁰⁾が挙げられる。

他方、パラリンピック競技に一層高度な専門性が要求されるようになったことに伴って、個々の選手に見合った、いわばオーダーメイドの技術が重要になった。その結果、技術の社会的普及が難しくなったという声もあり³¹⁾、今後の動向が注目される。

翻って、パラリンピックの経済的インパクトについては、これを、経済一般の立場からではなく、企業の立場から考えると、1つ目にパラリンピックの競技場や選手村での商品、サービスの提供による売上げ、あるいは宣伝活動並びにロゴや「パラリンピック」というブランドの活用、2つ目にパラリンピックを通じて知名度が上がった個々の選手を企業のPRに活用すること、3つ目に社会貢献活動の一環としての障害者スポーツ支援、などの側面が考えられる。

商品開発や販売に関連しては、パラリンピックマークを使用した製品や宣伝活動の他、いわゆる大会マスコットの商業的活用もある。例えば、2000年のシドニー大会のマスコット「リジー」や1996年のアトランタ大会の不死鳥をあしらった「ブレイズ」は、大きな商業的成功を生んだとされる³²⁾。

いずれにしろ、いわゆるスポンサーシップの問題は、スポンサー料と引き換えに企業がどのような権利を得るか、また、その権利をどう活用するかによって効果が決まるこ

とは言うまでもないが、オリンピックと違って、「パラリンピック」というブランドの価値は国や地域によってはそれほど高くない（認知度が低い）。そのため、むしろパラリンピック活動を通じて名前が知られるようになった選手を宣伝広告に使用することが効果的である場合も多い。その例として、アメリカの両足切断の障害を持つ重量挙げ選手グラッデイ・オールドリッジを挙げる者もいる³³⁾。日本人選手の例としては、義足の走り幅跳び選手佐藤真海が、2020年東京オリンピック・パラリンピック招致活動を契機に、各種のPR活動に活用されるようになったことが挙げられよう。

社会貢献活動の対象としてのパラリンピックについて近年国際的にも著名なものとしては、ロンドン・パラリンピック大会をいわばターゲットとして、選手育成、障害者スポーツの社会啓発などのため170万ポンドに上るプロジェクトを立ち上げたデロイト会計事務所を挙げる者もいる³⁴⁾。

他方、スポンサーシップと企業寄付のやりかたをめぐる企業間の争いが、特定企業に対する不買運動的な動きに発展した例（例えばアトランタ大会において、オリンピックをスポンサリングしながら、パラリンピックのスポンサーにならなかった6企業が、他の企業のパラリンピック協賛活動を妨害したとして、6企業の製品ボイコット運動が起こったこと³⁵⁾）などもある。

3. 社会的意義

スポーツ分野を超えて、パラリンピックの一般的あるいは社会的意義として考えられることの1つに、障害者の暮らしやすい社会作りへのインパクトがある。

そうした影響は、まず物理的な環境の整備に表われよう。

公共的な施設、道路、交通機関などにおける、いわゆるバリアフリー状況の改善などがその典型である。障害者用のエレベーターの設置や盲人用の音声信号や誘導マークの設置といった施設面での改善の他に、新しい器具やアイデアの採用といった、いわば機能面、技術面での改善も含まれよう。例えば、1964年の東京パラリンピック大会にあたり、ヨーロッパから日本への選手や関係者の輸送を担当したKLM航空とエール・フランスは、航空機内の狭い通路を行き来できる車椅子を開発して乗客の便宜を図った³⁶⁾。そうした手配も、広義でのバリアフリー化進展に役立ったと言える。

環境整備の一環として引用される例に、アテネ・パラリンピック組織委員会と地元企業との連携プレイによる、障害者に優しい店運動がある。アテネと周辺3都市の商工会議所の協力によって、「アクセシブル選択プログラム」が作られ、一定の基準に合った「障害者に優しい」店や料理店に認定マークがつけられた。さらに、選手や関係者にそ

の手引きを配布したのであった³⁷⁾。

アトランタ大会では、ジョージア工科大学のキャンパスがパラリンピック競技に用いられたが、これを契機として、大学のキャンパスが障害者に優しいものになり、障害のある学生を受け入れやすい環境が整備されたと言われる。これをもってアトランタ・パラリンピックの1つの「遺産」と呼ぶ者もいる³⁸⁾。

こうしたアクセスの増大、改善が総合的に行われた例の1つは、長野パラリンピック大会であろう。ここではまず、競技場への障害者のアクセスの改善をはかるべく、長野県作業療法士会の人々が、ボランティア活動として現場の視察と提言を行った。また、観戦環境の改善としては、競技場内での情報アクセス改善のためアイススレッジホッケー観戦席の一部に磁気ループが設置され、その後のモデルとなった。さらに、一般の公共施設におけるアクセスの改善として、例えば、山ノ内町では公共施設における手すりや自動ドアの設置が推進された。また、一般的な社会意識の変革としては、盲導犬同伴での宿泊の受け入れについての指導、啓発などがあったとされる³⁹⁾。

パラリンピック大会を通じたこうした社会的意識の変革については、「障害」を見る視点の変化と「障害者」を見る視点の変化に分けて考えることができる。前者の「障害」の見方については、見せるべきものではない、あるいは隠すべきものという伝統的見方が、スポーツ選手の活躍を通じて、むしろ障害を表に出すことで、障害者自身の自信、そして社会での受容につながるという見方によって変わってゆくとも言える⁴⁰⁾。このことは、そもそも「障害」なるものは、医学的あるいは物理的なものではなく、社会が作り出したものであるという考え方が定着してゆく一助となる。

そのような意識の変化と関連するものに、障害者としての登録の問題がある。社会意識の変化につれて、障害者は個人や家庭において守られ介護されるべき対象から、社会全体としての福祉の対象とみなされるようになり、障害者としての登録数の増加につながる傾向を指摘することができる。例えば、ソウル・パラリンピック大会の効果の1つは障害者の登録数の増加であったとされる。一説によれば、パラリンピックを境にそれまで約9万人であった障害者の登録数が、約50万人に増加したと言われる⁴¹⁾。

また、障害者自身にとって、「障害」の意味、あるいはそれを克服する意味が変わってくる側面もある。すなわち、障害が個人的あるいは物理的なものと考えられている限り、障害者の能力、力量は各個人の「個人的あるいは内的商品」になるのである⁴²⁾。

この意味では、障害者スポーツ競技を障害者の障害克服の努力の結晶とみなして、そうした克服自体を強調することは、障害者スポーツ自体のスポーツとしての「市場性」が低い状態にあっては、障害を個人的なものから社会的なものへと転換する、過渡的な触媒とみなすこともできよう。言い換えれば、障害の社会的性格は、障害者スポーツの

競技スポーツとしての商業性・市場性を導く入口とも言えるのである。

この点とも関連して、観客の観戦態度の中に、パラリンピックが「障害者の大会」から「競技スポーツ大会」へ変化してゆく兆候を感じたとする見方があることに注目すべきであろう。すなわち、障害者の大会という見方が強ければ、競技者に対して、野次や非難の声をあげることは遠慮されがちであるが、競技大会という色彩が支配的になれば、野次や不平もあからさまに表現されるという点である。現に、バルセロナ・パラリンピック大会のバスケットボール競技では、競技中に観衆が選手に対してブーイングを行うシーンもあったと言われ⁴³⁾、こうした観客の態度はある意味で、パラリンピックが一般の競技スポーツと同じ次元で観戦されていることを示す兆候とも考えられる。

次に、「障害者」に対する見方の変化については、長野パラリンピック大会の例を挙げることができる。「かつては障害者と共にスキー場へ赴き食堂で弁当を広げると、周囲にいた家族連れがそっと外へ出て行ったりしたものであるが、パラリンピック以後は、遠ざかるどころかむしろ席を譲る人も出てくるようになった⁴⁴⁾」という長野の地元紙の報道は、パラリンピックを通じて一般社会の見方が変わったことの一例と言える。

また、パラリンピック大会における選手の躍動を通じて、健常者が、自分自身への見方を変化させる触媒となる場合があることにも注目する必要がある。すなわち、通常、つまらぬことを嘆き、悲しんでいる自分自身の日常が、巨大な困難を克服した選手たちの活躍の前に、「恥ずかしいもの⁴⁵⁾」と映り、観戦した健常者の自己反省、自己改革の刺激となるという要素である。

これら全て、すなわち、障害への見方、障害者への見方、そして健常者の己れ自身への見方の変化は、ある意味では、人間の身体についての見方の変貌と関連している。すなわち、オリンピックを始めとしてほとんどの近代スポーツにおいては、身体は健康で肉体美なり躍動美に満ちたものが礼讃され、肉体の在り方に対するある種の価値観が行きわたっているが、障害者スポーツの広範かつ大規模なスポーツ大会であるパラリンピックで活躍する選手が広く世界の目にさらされることによって、人間の身体の美や肉体の在り方についての見方に反省を促す契機となっているとも言えるのである⁴⁶⁾。そうした価値観の転換は、まずもって障害者自身がスポーツ活動を行う過程で自ら体験するものであろうが⁴⁷⁾、それが、競技を通じて観客ひいては社会一般に影響してゆくと考えられる。

加えて、パラリンピックは、聴覚障害者を除く各種の障害者がいわば一堂に会する機会であり、障害者同士の相互認識や相互交流に役立つ面があることも忘れるべきではない。

他方、精神面の影響として、障害者介護の在り方についての意識ないし態度の改善、

深化といった点が挙げられる。1964年の東京パラリンピック大会でパラリンピアンへの支援に当たったボランティアたちは、単に優しく丁寧に世話するのではなく、障害者の自立意識を傷つけないように行うことが大切であると認識したと言われる⁴⁸⁾。こうしたことは、正に精神的な「遺産」とも言えよう。

また、パラリンピックは学校児童生徒に対する障害者問題についての啓発、教育の絶好の機会となり得る⁴⁹⁾。シドニー、アテネ大会などでは、児童生徒を大会会場に招待する特別の教育プログラムが開発、実施されたとされる。

ただし、学校教育におけるパラリンピック関連行事や啓発活動が、児童生徒の障害者に対する意識の変化に結び付いたか否かについては、否定的な研究⁵⁰⁾と肯定的研究⁵¹⁾双方が見られる。観察の時間軸の取り方や数量的検証のやり方などが、今後の課題として残されていると言えよう。

さらに、大会に参加した人々やボランティアたちへの影響を越えて、直接参加しなかった人々もさまざまな関連活動を通じてパラリンピックを自らに近いものと受け止め、障害者スポーツに親近感を抱く1つの契機となったことにも注目すべきであろう。例えば、1998年の長野パラリンピック大会閉会式では平和と友情のシンボルとして700万羽を超える折り鶴が飾られた。これらの鶴は、35万人の有志の人々の手によって作られたものであり、人々は自らの鶴がパラリンピックに「参加」したことを通じ、パラリンピックをより近いものと感じることになったのである。

4. スポーツ振興上の意義

(1) スポーツ振興一般へのインパクト

パラリンピックは当然、選手の競技能力の向上と競技そのものの普及といった「振興」効果を持つものであるが、パラリンピック大会を契機に整備されるものとして具体的に最もわかりやすいものは、高度の競技能力を育成するための専用トレーニングセンターの設置であろう。例えば、2008年の北京パラリンピック大会を契機として、中国に約24万平方メートル規模の障害者スポーツトレーニングセンターが設立されたことが挙げられよう⁵²⁾。

パラリンピックがいわばスピノフ効果を発揮して各種の障害者スポーツ競技大会の開催へ結び付いていく軌跡も、パラリンピック独特の効果と言えよう。そうした軌跡の1つに、日本における障害者スポーツ大会の開催が挙げられる。1964年の東京大会の後、脊椎障害以外の障害者も含めた身体障害者スポーツの全国大会が初めて開かれたが、これは正にパラリンピックの効果であったと言えよう。

国際的な動きとしては、青年障害者スポーツ世界大会が挙げられよう。最初の青年障害者スポーツ大会は英国で1986年に行われたが、この大会は1984年のパラリンピック大会がアメリカ国内の混乱もあって、英国（ストークマンデビル）で開催されたことが契機となったものであった⁵³⁾。

パラリンピック大会をはじめとしてこうした国際大会が、果たして障害者一般のスポーツ活動の振興に直接役立ってきたか否かについての数量的な検証は、十分なされているとは言い難い。そもそも、オリンピックなど健常者のスポーツ大会の一般人への「浸透効果」を疑問視する実証研究もあるが⁵⁴⁾、元来スポーツ活動参加率がかなり高いと見られる英国などにおいてすら、障害者の参加率は極めて低い状態にある（ロンドン大会前の段階であるが、障害児童の約53%は1週間に1時間以下しか体育の授業を受けていなかった⁵⁵⁾）ことから、障害者のスポーツ参加率へのパラリンピックの影響はかなり高いものと推定される。現に、長野県障害者スポーツ協会傘下にある障害者競技団体の加入者数は、パラリンピック開催前年の1997年には200名強であったものが、1998年には約300名強、1999年には約400名強に増大している⁵⁶⁾。

他方、パラリンピック大会並びにそれに伴う各種国際大会の開催は、各競技における競争条件の整備（例えば、機能的クラス分けの導入）やルールの明確化と周知徹底を促す契機ともなった。例えば、1992年のバルセロナ大会を契機に、それまで2競技にしか作られていなかった世界共通のルールブックが、すべてのパラリンピック競技において作られるようになった⁵⁷⁾。

また、パラリンピック大会が、それまであまり盛んでなかった競技も行われるようになる契機となったことも挙げられる。ソウル・パラリンピック大会では、競技数が従来の5つから18に一気に増えた⁵⁸⁾。

さらに、長野パラリンピック大会を観戦して、自らも競技スポーツに取り組むようになった例として、バイアスロンの佐藤圭一やアルペンスキーの井上真司（いずれも、バンクーバー大会に出場）などを挙げることができ、パラリンピック大会が選手育成に刺激を与えたことを示している。

(2) 選手への影響

一般、国際的スポーツ大会が選手に与える影響としては、競技能力の向上や国際的視野の深まりといった側面が挙げられる。もとより、こうした効果ないし影響はパラリンピックにおいても重要であろうが、世界選手権と異なるパラリンピック独自の影響を考えると、それはやはり（選手が出場する競技や国籍に違いがあるのみならず）障害の種類を異にする選手が一堂に会することと関連していると言えよう。自分と全く違った種

類の障害を抱えた人々と一緒になり、しかも同じ場所でスポーツ競技に参加する様子を見、交流することによって、障害者同士が他の障害者に対する理解を深める意味があると言える⁵⁹⁾。

この観点から言えば、パラリンピックの開会式・閉会式は、オリンピック以上の意味を持つものとなる。だからこそ、シドニー大会の閉会式の日程が、デモンストレーション競技のせいもあって、大半のパラリンピアンがシドニーを離れた後に行われたことについては、批判が強かったのである⁶⁰⁾。

(3) 観客への影響

オリンピック大会はその独特の雰囲気や伝統もあって、一般のスポーツ大会と異なり、観客と選手との間にある種の一体感が醸成されることがしばしばある。それは、ホスト国の歓迎ムードとも関連していると考えられるが、障害者スポーツ大会たるパラリンピック大会の場合は、一層意味深いと考えられる。

1964年の東京大会の報告書がパラリンピックの特徴の1つとして選手と観客の一体感の醸成を挙げていることは、特に注目される。この点はさらに発展して、健常者と障害者がともに1つのスポーツを楽しむ環境の必要性に関する社会的意識の高まりとも連動しうる。現に、長野パラリンピック大会を観戦した長野の県議会議員がそうした発言を公に行っている⁶¹⁾。

5. 文化的意義

パラリンピックの文化的意義は、(1)大きな国際的イベントであるパラリンピック大会を各種の芸術、芸能の紹介、普及の機会として活用する側面、(2)パラリンピックが芸術作品を生み出すインスピレーションを与える側面、(3)障害者の文化的活動や作品を通じて障害者の社会参加を促進し、また芸術作品の市場化あるいは商業化を促す側面、(4)障害者の作品や演技を通じて鑑賞者の芸術を見る視点が転換されるという側面などに、分けて考えることができよう。

(1) 各種芸術・芸能の紹介・振興の場としての意義

国際的イベントとしてのパラリンピック大会は、開会式・閉会式の「演出」をはじめとして、観客や訪問者に開催国あるいは開催地域の芸能を紹介し、それにより地元芸能の保存・振興に役立たせることができる。長野パラリンピック大会は、この点について好例を提供している。すなわち、開会式における聖火の入場と点火の儀式は、国の無形

文化財に指定されている野沢温泉村の「道祖神火祭り」を元にしたもので、地元の民俗芸能の紹介と同時に、その保存・振興に貢献したとされる⁶²⁾。

また、閉会式の演出の基礎となった「大田楽」も、各地の残る田楽踊りや神事を現代風にリアレンジしたもので、同じく伝統民俗芸能の振興と結びつくものであった⁶³⁾。

(2) 芸術作品へのインスピレーション

パラリンピック大会そのものが芸術的インスピレーションを与える（あるいはその間接的触媒となる）という側面は、ポスター、写真、映画、文学作品などにおいて考えられる。具体例としては、1964年東京パラリンピック大会の観戦を契機の1つとして著された水上勉の小説「くるま椅子の歌」⁶⁴⁾が挙げられよう。この小説は、障害を負って車椅子生活を余儀なくされる娘を持つ親が、大会で活躍する選手の姿を見て、車椅子に頼らず自立して歩けるよう娘を訓練してゆくことに決心するまでの心境を描いたもので、パラリンピックが生んだ作品とも言える内容となっている。

また、長野パラリンピック大会の際に、競技会場の1つとなった山ノ内町で、大会のシンボルマークを視覚障害者にも理解してもらおうとマークを木彫りにした彫刻が作られたが⁶⁵⁾、これもパラリンピックに触発された作品と言えよう。

(3) 障害者の社会参画への触媒とエンパワーメント

パラリンピック大会のような国際的に注目されるイベントの機会に、障害者芸術作品あるいは演芸などが紹介されることは、作者や演者にとって励みとなり、いわば障害者の社会活動参画を促進することになる。この点は、障害者スポーツの祭典としてのパラリンピック大会の機能と相通ずると言える。これを障害者自身の立場から見れば、スポーツと同じく芸術活動も、障害のある自己に残された能力あるいは潜在能力の発揮の機会であり、健常者の場合以上に自己実現の場として重要なものになっていると言える。長野パラリンピック大会の際に開催された障害者芸術の祭典「98アートパラリンピック長野」も、この点を主たる目的の1つとしていた⁶⁶⁾。

他方、芸術の場合、作品あるいは演芸そのものがパラリンピックにおける発表機会を契機に商業化され、市場化されるきっかけができることにもなるが、この点は、スポーツ選手のいわゆるプロフェッショナル化と若干類似した要素を持つと言えよう。

また、パラリンピックを契機とする障害者の芸術活動の展開は、障害者芸術をとりまく社会環境を変える契機ともなる。再び長野パラリンピック大会を例にとれば、第1に、障害者の作品の展示が福祉施設から美術館や商店のショーウインドーへと広がってゆく契機となった⁶⁷⁾。同時に、「98アートパラリンピック長野」は、長野県信濃美術館など

文化施設のバリアフリー化を推進する触媒となった⁶⁸⁾のみならず、学芸員などの関係者が障害者アートにより関心と理解を持つきっかけともなった⁶⁹⁾。

(4) 視点の転換

パラリンピック大会を機としてその前後に催される芸術的イベントや展示会では、単発的な催しと比べて、かなり多くの観衆・鑑賞者の動員が可能である。とりわけ障害者芸術の場合にはその機会が少ないだけに、規模の大きさが観衆に及ぼすインパクトは無視できない。障害者芸術が既成の美術や芸能の概念を打破するインパクトを与えていることは、特に重要である。

例えば、「98アートパラリンピック長野」公募展で銅賞を獲得した作品の1つは、陶芸作品ながら、中に陶土の球が入っており、作品に触れると音が出る仕組みになっている。これは、一般には視覚に頼って鑑賞される陶芸作品が、触覚と聴覚によって鑑賞しうることを示した視覚障害者の作品であった。こうした作品を通して、芸術作品を鑑賞する視点の転換、ひいては既成の美術概念に対する挑戦を鑑賞者が感じられるようになることが期待されていると言える⁷⁰⁾。

こうした既成概念への挑戦は、鑑賞の視点の転換のみならず、そもそもスポーツにせよ芸術活動にせよ、障害者の社会的活動に対して、そこに込められた苦難や苦勞を称賛すること（いわゆる「がんばれ精神」の称賛）自体に疑問を呈する形にもなり得る。「98アートパラリンピック長野」では、パラリンピックがオリンピック以上にスポーツにおける「がんばれ精神」の凝縮のように見られ、またそれが称賛されがちであることに対する挑戦があった。すなわち、1つの書道作品が「頑張らない」という標語を書き、それが広く報道されたのである。このことは正に、スポーツ大会としてのパラリンピックの理念に対する、ある種の挑戦であったとも言えよう。

注

- 1) Brittain, Ian. 2010. *The Paralympic Games Explained.*, Routledge, p.7などを参照。
- 2) Howe, David. 2008. *The cultural politics of the Paralympic movement: Through an anthropological lens.* Routledge, p.18.
- 3) Brittain, Ian. 2011 *From Stoke Mandeville to Sochi.*, Common Ground, pp.43-44.
- 4) 小倉和夫「東京パラリンピックの残したもの」『日本財団パラリンピック研究会紀要』, 第1号, 2015年, pp.5-23.
- 5) Legg, David and Gilbert, Keith eds. 2011 *Paralympic Legacies.* Common Ground, p.167.
- 6) BBC News Magazine 2012年7月4日号によれば、その時点で、英国選手団に選出されていた者で、イラク戦争あるいはアフガン戦争で負傷した元兵士は少なくとも5人おり、又、軍務中に爆弾処理などのために負傷を負ったものは2人おり、こうした元軍人は、英国の選手団全員

の約2パーセントを占めるとされている。なお同じ資料によれば、2001年10月17日から2012年3月31日までの期間にイラク又はアフガン戦争で四肢全部または一部負傷した英国兵は262名に上るといふ。

- 7) パラリンピックの広報問題に詳しい関係者から筆者が聴取したところによる。
- 8) この点について、ジャーナリズムの立場から論じた一例としては、2009年10月9日付英国デイリー・テレグラフ紙のムーア記者署名記事がある。
- 9) Legg and Gilbert 前掲書 *Paralympic Legacies*, p.114.
- 10) 『毎日新聞』, 2012年8月30日夕刊。
- 11) この点については、Legg and Gilbert 前掲書 *Paralympic Legacies*, p.169および Brittain 前掲書 *The Paralympic Games Explained*, p.92など。
- 12) Chun, Hea-Ja. 2015. "The Positive Impact and Legacy of the 1988 Seoul Paralympics on Sports for People with Disabilities." 『日本財団パラリンピック研究会紀要』第2号, 2015年, pp. 41-58.
- 13) IPC ウェブサイト2009年閲覧。
- 14) 脚注4に同じ。
- 15) 小倉和夫「1998長野パラリンピックが残したもの」『日本財団パラリンピック研究会紀要』, 第3号, 2015年, pp.1-32.
- 16) Legg, David et al. 2004. "Historical Overview of the Paralympics, Special Olympics and Deaflympics", *Paraestra* 20 (1), pp. 30-36.
- 17) Howe 前掲書 *The cultural politics of the Paralympic movement: Through an anthropological lens*, p.25.
- 18) 脚注12に同じ。
- 19) Legg and Gilbert 前掲書 *Paralympic Legacies*, pp.70-71.
- 20) 脚注15に同じ。
- 21) Conference for Sports for All 1973.
- 22) 長野県の統計については、筆者拙稿「1998長野パラリンピックが残したもの」『パラリンピック研究会』, 第3号, 2015年, pp.1-32が詳しい。なお、ここで述べている「係数」は、長野県の統計を基に筆者が計算したものである。
- 23) 長野県地方自治研究センター『長野冬季オリンピック白書』, 2000年, p.123.
- 24) 『長野県議会本会議報告書』, 平成10年3月18日03号。
- 25) Legg and Gilbert 前掲書 *Paralympic Legacies*, p.224.
- 26) 『朝日新聞』, 2008年9月18日。
- 27) 『朝日新聞』, 1998年3月10日。
- 28) 『バンクーバー大会選手団報告書』, p.46, p.49.
- 29) 『ソチ・パラリンピック選手団報告書』, pp.22-23.
- 30) 『朝日新聞』, 1998年3月5日。
- 31) この点については、例えば、Howe 前掲書 *The Cultural Politics of the Paralympic movement: Through an anthropological lens*, pp.125-26. に詳しい。また、諸分野における用具の技術開発については、例えば、Gilbert, Keith and Schantz, Otto. 2008 *The Paralympic Games*, Meyer & Meyer, pp.119-120. に詳しい。
- 32) Darcy, Simon and Cashman, Richard eds. 2008. *Benchmark Games: The Sydney 2000 Paralympic Games*. Petersham. Chapter 12, "Legacies", p.69.
- 33) Gilbert and Schantz 前掲書 *The Paralympic Games*, p.80.
- 34) Legg and Gilbert 前掲書 *Paralympic Legacies*, p.223.
- 35) Legg and Gilbert 前掲書 *Paralympic Legacies*, p.67.

- 36) Bailey, Steve. 2008 *Athlete First: A history of the Paralympic movement*, John Wiley & Sons, p.28.
- 37) Gold, J. & Gold eds. M. *Olympic Cities*, p.12. *IPC Annual Report 2004*, p.6.
- 38) Hughes, Anthony. 1999. "The Paralympics." Cashman, Richard, and Hughes, Anthony eds. *Staging the Olympics: the event and its impact*. University of New South Wales, pp.170-182.
- 39) 脚注15に同じ。
- 40) Howe 前掲書 *The cultural politics of the Paralympic movement: Through an anthropological lens*, p.130.
- 41) Chun, 前掲書 *The Positive Impact and Legacy of the 1988 Seoul Paralympics on Sports for People with Disabilities*, p.43。なお、具体的数字は Legg and Gilbert 前掲書 *Paralympic Legacies*, p.50によるが、著者はこの数字を伝聞によるものとし、公文書上の根拠を示してはいない。
- 42) Internal external という言葉は Howe 前掲書 *The cultural politics of the Paralympic movement: Through an anthropological lens*, p.80でも用いられている。
- 43) Legg and Gilbert 前掲書 *Paralympic Legacies*, p.59.
- 44) 『信濃毎日新聞』, 2008年3月13日。
- 45) Gilbert and Schantz 前掲書 *The Paralympic Games*, p.148.
- 46) 例えば、2004年10月15日付、英国紙 Observer の Clare Balding 署名記事には、こうした価値観の転換についての体験、意見が述べられている。
- 47) Howe 前掲書 *The cultural politics of the Paralympic movement: Through an anthropological lens*, p.130は、この点を特に取り上げている。
- 48) Kasai, Y. *Hosts to the Games to Tokyo.*, The International Stoke Mandeville Games for the Paralysed in Tokyo.
- 49) Gilbert and Schantz 前掲書 *The Paralympic Games*, p.60.
- 50) Wilhite, B., Mushett, C. A., Goldenberg, L., & Trader, B. R. 1997. "Promoting inclusive sport and leisure participation: Evaluation of the Paralympic day in the schools model." *Adapted physical activity quarterly*, 14 (2), pp.131-146.
- 51) Darcy, Simon "Paralympic planning." Cashman, R. and Darcy, S. *The Sydney 2000 Paralympic Games, Sydney*: Walla Walla Press /Australian Centre for Olympic Studies, University of Technology, pp. 74-98.
- 52) その規模、予算などについては、"China's Paralympics get a good head start", 『チャイナ・デイリー』, 2008年5月23日を参照。
- 53) Bailey 前掲書 *Athlete First: A history of the Paralympic movement*, p.77.
- 54) Hogan, K. & Norton, K. 2000. "The Price of Olympic Gold" *Journal of Science and Medicine in Sport* 3, pp.203-218.
- 55) Legg and Gilbert 前掲書 *Paralympic Legacies*, p.193.
- 56) *Active Japan*, Vol.12, p.46.
- 57) Legg and Gilbert 前掲書 *Paralympic Legacies*, p.60.
- 58) Legg and Gilbert 前掲書 *Paralympic Legacies*, p.48.
- 59) Legg and Gilbert 前掲書 *Paralympic Legacies*, p.58.
- 60) Legg and Gilbert 前掲書 *Paralympic Legacies*, p.66.
- 61) 『長野県議会本会議議事録』, 平成10年3月17日02号。
- 62) 長野パラリンピック冬季競技大会組織委員会編 『長野パラリンピック冬季競技大会公式報告書』, p.139.
- 63) 同上, p.142.

- 64) 水上勉『くるま椅子の歌』, 中央公論社, 1973年。
- 65) 長野県下高井郡山ノ内町発行『長野オリンピック・パラリンピック山ノ内町記録誌』, pp.213-214。
- 66) 長野アートパラリンピック実行委員会『98アートパラリンピック長野入選作品集』, p.2。
- 67) 長野アートパラリンピック実行委員会『98アートパラリンピック長野報告書』, p.27。
- 68) 同上。
- 69) 『信濃毎日新聞』, 1998年12月11日。
- 70) 前掲書『98アートパラリンピック長野入選作品集』, p.26。

The Political, Economic, Social, and Cultural Significance of the Paralympics

Kazuo OGOURA

(The Nippon Foundation Paralympic Research Group)

As an international sports event for people with disabilities, the Paralympic Games can certainly be considered an important occasion for promoting disability sports. To be more specific, however, what is the significance of promoting disability sports? In what ways does their promotion have the same significance as the promotion of sports for people without disabilities, and in what ways is it different? The answers to these questions are not entirely clear.

For example, the promotion of sports for people without disabilities is generally believed to act as a catalyst in maintaining health, in promoting mental training and education, and even in contributing to social and economic development as well as to regional development. Moreover, the professionalization and commercialization of a considerable number of sports have made sports a substantial force as an industry.

The majority of disability sports, however, have not become professionalized or commercialized, and because many of the sports activities have historically played a role in enabling people to overcome their disabilities or in their rehabilitation, their social and economic significance has had a tendency to be centered on the idea of “inclusion,” in other words, encouraging the social participation of people with disabilities and deepening society’s understanding of people with disabilities.

This viewpoint seems to have been accepted as a matter of course in the early stages of the history of the Paralympics but as the number of Paralympic events increased and the competitive ability of the athletes improved, the more attention the Paralympics began to draw as an international sports event and the more the perception of the games was called into question. In other words, there was a growing view that irrespective of whether athletes are with or without disabilities, those who engage in a high level of competitive sports should all be treated equally

as athletes, and there should be no special treatment for having a disability.

It has been the case in contemporary society that the social and economic significance of sports activities of the general public and of competitive sports by people who have undergone a high degree of training have come to be viewed differently, and that same viewpoint should apply when considering the significance of the Paralympics.

Furthermore, the modality of “fusion” of the Paralympics and the Olympics has progressed in many areas and, in tandem with this integration, the Paralympics have been drawing attention as an international event in its own right. Therefore, from the perspective of its political, economic, social, and cultural importance, it can be said that the time has come for us to consider the influence and the impact of the Paralympics as a major international event, rather than simply a “sports event for people with disabilities.”

Based on the above views, this paper examines the significance of the Paralympics from political, economic, social and cultural perspectives, as well as from the perspective of sports promotion. The discussion of political significance is divided into political significance (implications) and the establishment of relevant legal and organizational frameworks. Sports promotion will be considered from three perspectives: impact on the promotion of disability sports, effects on athletes, and effects on spectators.

1. Political Significance

(1) Significance in domestic and international politics

The origin of the Paralympics can be traced back to a disability sports event held at Stoke Mandeville in the suburbs of London, England in July 1948. The majority of the participants were people who were being treated at Stoke Mandeville Hospital, a rehabilitation center for soldiers who sustained spinal cord injuries during the Second World War. Dr. Ludwig Guttmann, who was in charge of the hospital, was very passionate about introducing sports for the rehabilitation therapy of people with physical disabilities. He had emigrated to England to escape from the persecution of Jews in Nazi Germany¹⁾, and his own life had been greatly affected by the war. In 1947, Dr. Guttmann began publishing a magazine called *The Cord* aimed at the

physical and mental rehabilitation of injured soldiers, and sports activities were one of the areas in which he was active²⁾.

In this way, the origin of the Paralympics was closely linked to the Second World War and postwar “recovery.” In other words, it was closely linked to war as a “cause of disabilities” and the process of recovery from it.

This disability sports event that started in England became an international event and saw the official participation of athletes other than British nationals for the first time in 1952 with the participation of athletes from the Netherlands. The event was later re-named the International Stoke Mandeville Games, and this remained the official name until the games were held in Heidelberg, Germany in 1972 (the 1964 Tokyo Paralympics were officially the 13th International Stoke Mandeville Games).

Reflecting the background of its origin, the Stoke Mandeville Games initially welcomed only participants from British Commonwealth countries and allies of Great Britain during the Second World War. Germany participated for the first time in 1954, followed by Italy two years later. Even at the 8th International Games in 1959, all but India and Pakistan were Western countries³⁾.

The connection with war also applies to Japan to a certain extent. Among the athletes participating in the 1964 Tokyo Paralympics were Second World War veterans with disabilities⁴⁾. For Japan, a country that had to relinquish hosting the already scheduled 1941 Tokyo Olympics due to the war, the 1964 Tokyo Olympic Games symbolized Japan’s full return as a member of the international community and the end of the postwar era. Moreover, moves to host the Olympics started in the mid-1950s, the period in which Japan finally began to recover from the scars of the Second World War. In this sense, the 1964 games are linked to the Second World War in invisible ways.

Furthermore, during the 1970s, Alpine and cross country skiing drew attention as rehabilitation therapy for sick and wounded veterans of the war in Vietnam, and this therapy is said to have become an opportunity to train future athletes⁵⁾.

Even in recent times, British and American veterans who were wounded in wars in the Middle East were among the athletes who participated in the London Paralympic Games⁶⁾, and it is believed that among participants from developing countries, there were those who had sustained injuries in civil wars. The connection between war and the Paralympics has continued to this day.

Nevertheless, the fact that war and the Paralympics are connected by invisible links has received little mention in recent years. There has even been a tendency among some to keep this association from coming to the fore. For example, in the lead up to the London Paralympic Games, there were supposedly heated arguments between the International Paralympic Committee (IPC) and a public relations firm in Great Britain over the pros and cons of including scenes of war in the promotional video for the Paralympics⁷⁾.

The recent tendency to avoid mentioning the connection between the Paralympics and war is based on the notion that the connection is an element that could damage the image of the Paralympics⁸⁾. However, making unnecessary efforts to conceal the objective fact that there is a connection between the two may conversely have an even more negative impact on the image of the Paralympics. In any event, it cannot be denied that the Paralympics have political implications as a symbol of recovery from the scars of war in various contexts and, for this reason alone, the Paralympics can be a potential catalyst for impressing upon people the importance of peace.

In a similar vein, the association of the Paralympics with natural disasters cannot be ignored in terms of political significance. In the same way that the Paralympics have been used to encourage the rehabilitation of people suffering from war-inflicted injuries, the “power” of the Paralympics can also be effectively used in the psychological rehabilitation of victims of natural disasters. The Beijing Paralympic Games can be cited as a case in point. Held just a few months after the Great Sichuan Earthquake of May 12, 2008, four disaster victims were chosen as torchbearers of the games. One of them was a person who suffered the loss of a limb in the earthquake. The participation of these runners is said to have helped other victims in gaining the strength to recover⁹⁾.

The more the Paralympics begin to draw attention as an international event, however, the more apt they are to be exploited by certain countries as an opportunity to send out political and diplomatic messages to the international community. There are already a number of instances where this has been evident. For example, in the 2012 London Paralympic Games, North Korea sent an athlete (a swimmer) for the first time in the history of the Paralympics. The woman bearing the national flag and marching alongside the athlete as a so-called “leading athlete” during the opening ceremony was the secretary-general of the Chosun Disabled Persons Athletic

Association and a former member of the unified table tennis team of North Korea and South Korea, which had previously been formed during a World Table Tennis Championship. The presence of this woman at the Paralympics was aimed at advertising to the international community North Korea's commitment to the problems of people with disabilities, and indirectly impressing upon the international audience North Korea's conviction regarding the unification of the Korean Peninsula¹⁰.

Moreover, international political issues common to both the Olympic and Paralympic Games are beginning to draw attention in the context of the Paralympics. The issue of women's participation is an example. In the future other issues, for example LGBT issues, may be discussed as a "political issue" in the Paralympics in the same way as in the Olympics.

There is also the possibility that the Paralympic Games can take on a "political color" in a different way from being exploited or abused as a venue for calling attention to specific political issues, when athletes protest against such political intervention itself.

Because the Paralympic Games attract a widespread, global participation of diverse people with disabilities, they can be considered an ideal venue for globally establishing the identity of "people with disabilities." On the other hand, in view of recent trends to consider disability sports not as activities for people with disabilities but purely as sports, it remains to be seen whether the Paralympics will play a beneficial role in establishing a global identity for people with disabilities. There are still some delicate issues to consider¹¹.

(2) Establishment of a legal framework and organization

① Establishment of a legal framework

Among various aspects of the Paralympics to consider, such as effects, legacy, or social significance, one of the aspects that can be confirmed empirically more readily than others is the legal framework. This is because some host nations have used the Olympic Games as an opportunity to put in place legislation concerning people with disabilities.

One example is the Seoul Paralympic Games. In South Korea, the Disabled Persons Welfare Law was already established in 1980 but the 1988 Paralympic Games served

as an opportunity for making legal reforms to further improve the registration system for people with disabilities by expanding the scope of people with disabilities covered under the law in 1989. This is said to have been a reflection of heightened social awareness of the need for measures for people with disabilities following the Paralympic Games¹²⁾.

This legal reform can be said to reflect two phenomena. One is the increase in social interest in measures for people with disabilities. The other is that the Paralympic Games provided an opportunity to impart a new viewpoint to people with disabilities and their close relatives in a society where people with disabilities traditionally avoided going out in public as much as possible.

Furthermore, in October 2008, after successfully bidding for the Sochi 2014 Winter Olympic Games, Russia tabled a law in its parliament to make the standards of the IPC applicable to people with disabilities in Russia. This is a good example of when bidding for the Olympics had an impact on laws concerning sports and measures for people with disabilities in the host country¹³⁾.

In Japan too, the 1964 Paralympic Games played a significant role in setting the stage for a shift in the orientation of the Act on Welfare of Physically Disabled Persons. A law that previously provided for people with disabilities from the viewpoint of providing care and protection, it established provisions for providing support for the independence of people with disabilities in 1967¹⁴⁾.

During preparations for the Nagano Paralympic Games, it was also understood that there was a need to focus on the establishment of legislation in regional areas. In 1995, for example, during preparations to host the games after Japan's successful bid, Nagano Prefecture enacted an ordinance concerning welfare town planning. This ordinance stipulated that builders of all architectural structures above a certain level, both new buildings and extensions, had to report on infrastructure considerations for people with disabilities¹⁵⁾.

Furthermore, participation in the Convention on the Rights of Persons with Disabilities can also be considered part of the legal framework supporting people with disabilities. For example, China ratified the convention in 2008, and it can perhaps be said that the Beijing Paralympic Games set the stage for the ratification.

② Organizational framework

Alongside legal systems is the issue of establishing organizations for people with disabilities.

While there are, of course, international matters to consider including issues concerning the IPC itself and the organizational infrastructure of international sports associations, there is also the system infrastructure in the host country. The Netherlands can be cited as a case in point.

A decision was made to hold the 1980 Paralympic Games in Arnhem in the Netherlands since the Soviet Union, the host nation of the 1980 Olympic Games, claimed it had no people with disabilities¹⁶⁾ and refused to hold the Paralympics in Moscow. With the decision to hold the games in Arnhem, the Netherlands established the Foundation of the Olympic Games for the Disabled, and this later became a catalyst in the promotion of disability sports in the Netherlands¹⁷⁾.

This is reminiscent of the circumstances in which the Japan Sports Association for the Disabled was established in the wake of the 1964 Tokyo Paralympics. Similarly, the Korea Welfare Promotion Association for the Disabled was established following the 1988 Seoul Paralympic Games¹⁸⁾. After the 1996 Atlanta Paralympic Games, BlazeSports America was established as an organization for systematically promoting disability sports including in local areas. This can also be considered a legacy of the Atlanta Paralympic Games¹⁹⁾.

Here too, infrastructure improvement on a local level cannot be overlooked. At the time of the Nagano Paralympic Games, the town of Yamanouchi, which was chosen as the Alpine skiing venue, launched a council for promoting “human-friendly community development” as early as 1994, and proceeded with initiatives to promote a range of measures including the installation of automatic doors in the town hall building²⁰⁾.

2. Economic Significance

Dr. Guttman, who was chairman of the International Stoke Mandeville Games Committee and is also referred to as the founder of the Paralympics, spoke of the following example at an international symposium²¹⁾ held after the Tokyo Paralympic Games.

The success, endurance, and standards of the athletes with disabilities [in the

Paralympics] here provided special inspiration to the government of Japan, civil organizations, and employers, which are making efforts to provide support to the return of persons with spinal injuries to society and the business world. Within a period of six months after the end of the Olympics, in an area about 70 miles west of Tokyo, where many factories manufacturing cameras and communication equipment are located, the Nagano plant, which hires 56 persons with disabilities, was built as the first facility in Japan dedicated to the hiring of persons with spinal injuries.

Unlike the Olympics, the Paralympics have been the subject of almost no detailed quantitative analyses regarding their economic effects. However, according to results²²⁾ of measurements undertaken by relevant stakeholders in Nagano Prefecture regarding the Nagano Paralympic Games, the monetary value due to an added value of 5.5 billion yen from operating expenses of the games was 2.9 billion yen, and the amount generated from an added value of 8.9 billion yen spent by athletes and spectators was believed to be 6.4 billion yen. As a coefficient, the former was 55%, and the latter about 72%. If we compare this with a coefficient for the added-value induction effects of the Nagano Olympic Games (163% in relation to the operating expenses, 76% in relation to consumption by the spectators and athletes), it is clear that induction effects of the operating costs are significantly low. This may be because the Paralympic Games were largely managed by public organizations and volunteers, and few commercial elements were involved.

Furthermore, the impact on employment is often cited in regard to economic effects. In the case of the Nagano Paralympic Games, however, in contrast to total consumption by spectators and operating costs (investment) of 14.4 billion yen, employment inducement effects were said to amount to 1,202 people²³⁾. Effects on the employment of people with disabilities can be seen for example in improvement in vocational training and employment services. In the wake of the Nagano Paralympic Games, vocational training facilities as well as an employment support center for people with disabilities were established in Matsumoto City in the spring of 1998²⁴⁾.

The employment of people with disabilities can also be considered not only in terms of the effects of the Paralympics but also in the promotion of employment in the Olympics business. For example, during the construction of the Olympic Park for

the London Olympic Games, a target was set to engage people with disabilities for 3% of the contract workers in the construction²⁵⁾.

As an economic aspect, the impact of the Paralympic Games on the development and dissemination of technology can be cited. This is seen first of all in the development and application of technology. For example, wheelchairs made with carbon fiber, a material lighter than aluminum and with less air resistance, made their debut in track events of the 2008 Beijing Paralympic Games²⁶⁾.

Furthermore, developments in the area of transportation and their promotion cannot be overlooked. In the lead up to the 1998 Nagano Paralympic Games, the Japan Automobile Manufacturers Association (JAMA) organized a working group to promote the widespread use of welfare vehicles, which resulted in more than a 50% year-on-year increase in sales of special welfare vehicles in 1997²⁷⁾.

In recent years the development and spread of information technology has been increasing in importance. For example, a system called the “time launcher” for accurately sharing information between athletes and coaches during matches was developed for use at the Vancouver Games²⁸⁾.

It is also necessary to focus on the development of technology for athletes and coaches not only for the games themselves but also for training. For example, one company whose employees were chosen to participate in cross country events in the 2014 Sochi Paralympic Games is said to have developed equipment in collaboration with a university that allowed athletes to train indoors using roller skis while viewing video images of the sports site at Sochi projected on a screen²⁹⁾.

The development of a communications system for the elderly and people with hearing impairments by Shinshu University in the lead up to the Nagano Paralympic Games can also be cited as an example of the development of information technology for a broader social use. This system presents visual representations of sounds (such as the sound of a telephone or bell, etc.) on a television screen³⁰⁾.

In tandem with the demand for more advanced specialization in Paralympic events, tailor-made technology to suit individual athletes, or individualized technology, has become important. Some say that promoting the application of technology in society becomes difficult as result³¹⁾, and future trends in this area are worthy of attention.

When the economic impact of the Paralympics is seen not from an overall perspective but considered specifically from the viewpoint of corporations, it

encompasses other areas such as (A) sales from the provision of products and services at sports venues of the Paralympics and in the athletes' village, advertising activities, and the use of logos and the Paralympics brand, (B) use of individual athletes who become widely known through the Paralympics for PR purposes, and (C) the support of disability sports as part of corporate social contribution activities.

In product development and sales, in addition to products using the Paralympic trademark and advertising activities, there is also the commercial use of so-called game mascots. For example, for the 2000 Sydney Paralympic Games the mascot was Lizzie the frill-necked lizard and for the 1996 Atlanta Paralympic Games the mascot was Blaze, a caricature of a phoenix, which is said to have had significant commercial success³²⁾.

Regarding the issue of sponsorship, the effects are obviously determined by the rights a company gains in exchange for sponsorship fees, and how the rights are applied. However, unlike the Olympics brand, depending on the country and region, the value of the Paralympics brand is not particularly high (low level of recognition).

As a result, there are many cases in advertising where using an athlete whose name has become widely known through the activities of the Paralympics is effective. One example of such an athlete is Grady Aldridge, a double-amputee American weightlifter³³⁾. Among Japanese athletes, there is Mami Sato, who uses a prosthesis for the long jump. After her engagement in PR activities related to bidding for the 2020 Tokyo Olympic and Paralympic Games, she was in much demand for a wide range of PR activities.

Among internationally well-known examples of the Paralympics and social contribution activities is the accounting firm Deloitte UK that in recent years has focused on the Paralympics in its social contribution activities. Targeting the London Paralympic Games, it launched a project of over 1.7 million pounds for the training of athletes and for raising social awareness of disability sports³⁴⁾.

On the other hand, there are cases where a dispute between companies over sponsorship and methods of providing corporate donations developed into boycott-like activities towards specific companies. (For example, during the Atlanta Games, six companies that were sponsors of the Olympics did not become sponsors of the Paralympics and were accused of obstructing sponsorship activities of the Paralympics by other companies, which resulted in a boycott of the products of those

six companies³⁵.)

3. Social Significance

One aspect to consider in terms of the general or social significance of the Paralympics beyond the area of sports is the impact of the Paralympics on creating a society where people with disabilities can live comfortably.

This impact may first of all become evident in the infrastructure of the physical environment. Typical examples are improvement in areas such as barrier-free arrangements in public facilities, on roads and in means of transportation. In addition to improvements in facilities such as the installation of elevators for people with disabilities and audible traffic signal systems or guide marks for people with visual impairments, improvements may include functional and technological enhancements such as the adoption of innovative equipment and concepts. For example, during the 1964 Tokyo Paralympic Games, KLM Royal Dutch Airlines and Air France, which were responsible for the transportation of athletes and officials from Europe to Japan, developed wheelchairs capable of going up and down the narrow aisles of aircraft for the convenience of passengers³⁶. It can be said that such initiatives contributed to promoting accessibility in a broad sense.

One example that can be cited as an improvement in the environment was a campaign to make shops accessible to people with disabilities during the Paralympic Games in Greece. This was an initiative achieved through close cooperation between the Athens Paralympic Games Organizing Committee and local companies. Through the concerted efforts of the Chambers of Commerce and Industry of Athens and the three surrounding cities, ERMIS (Accessible Choice Programme) was established as an organization for awarding certification marks to accessible shops and restaurants that satisfied certain standards. It also compiled a directory listing these shops and restaurants and distributed them to athletes and officials³⁷.

During the Atlanta Games, the campus of the Georgia Institute of Technology was used for the Paralympics, and the university is said to have taken advantage of this opportunity to transform the campus to a friendlier place for people with disabilities, and established an environment that was more conducive to the acceptance of students with disabilities. There are even some people who regarded the

transformation that took place as one of the “legacies” of the Atlanta Paralympic Games³⁸⁾.

In terms of expansion and improvement in accessibility, the Nagano Paralympic Games can be considered an example where these were comprehensively carried out. First, to improve access to the Paralympic sports venues for people with disabilities, people from the Nagano Association of Occupational Therapists (Nagano OT Kenshikai) conducted inspections of various sites and made proposals as a volunteer initiative. To improve the viewing environment, a magnetic loop was installed in part of the viewing stand for ice sledge hockey to improve access to information inside the stadium, and this innovation became a model for use at other sites. Furthermore, to improve accessibility at general public facilities, the town of Yamanouchi installed handrails and automatic doors in public facilities. As a means of promoting change in general social awareness, efforts were made to provide guidance and orientations in accepting guests with guide dogs in accommodation facilities³⁹⁾.

The change in social awareness resulting from the Paralympic Games can be divided into the change in people’s view of “disabilities” and the change in people’s view of “people with disabilities.” Regarding the former, it can be said that the viewpoint of “disabilities” in the traditional sense, that is, the notion that disabilities should not be revealed or should be hidden, changes with the participation of athletes with disabilities to the viewpoint that bringing disabilities out into the open leads to building self-confidence in people with disabilities and their acceptance in society⁴⁰⁾. This may also assist in establishing the viewpoint that a “disability” in the first place is not a medical or physical state but something created by society.

In relation to this change in awareness, there is the issue of registration of people with disabilities. As social awareness changes, so too will the traditional view that people with disabilities are people who should be protected and cared for by individuals or family at home. Instead, it will be understood that people with disabilities should be cared for by the welfare system of society as a whole. There are also indications that this recognition leads to an increase in the number of people who register their disabilities. For example, an increase in the registration of people with disabilities is said to be one of the effects of the Seoul Paralympic Games. According to one source, the number of people registered as having disabilities, which had been about 90,000 until then, rose to about 500,000 following the Paralympics⁴¹⁾.

There is also the change in the meaning of “disability” or the meaning of people with disabilities overcoming disabilities. In other words, as long as a disability is viewed as a personal or physical attribute, the capability and competence of people with disabilities will continue to be considered as “individual or internal commodity” of each individual⁴²⁾. In this sense, in an environment where the “marketability” of disability sports as sports remains low, looking upon sports events for people with disabilities as the culmination of the endeavors of people with disabilities to overcome their disabilities, and emphasizing these activities themselves as acts of overcoming disabilities may be viewed as a catalyst that changes the context of disabilities from a personal to a social element. Put another way, the social nature of disabilities may also be considered an entry point for the introduction of commercial potential and marketability of disability sports as bona fide sports events.

In this regard too, attention should perhaps be paid to the existence of the viewpoint that perceives signs of a change in the Paralympics from “an event for people with disabilities” to a pure “sports event” in the viewing attitude of spectators. In other words, when there is a prevailing view that a sports event is for people with disabilities, spectators are apt to refrain from booing or raising their voices in criticism of the athletes. If the perception of these events is more strongly colored by the sports aspect, however, as with mainstream sports events today, jeering and dissatisfaction are likely to be expressed more overtly. During a basketball event in the Barcelona Paralympic Games, scenes of spectators booing athletes during the game were reported⁴³⁾. In one sense, however, the demonstration of such an attitude by spectators can be considered an indication that games at the Paralympics are being viewed on the same level as ordinary sports.

Here, one example of change in the way people view “people with disabilities” that occurred at the time of the Nagano Paralympic Games can be cited. A local newspaper reported that in the past when people with disabilities went to ski slopes for recreation, when they had lunch in the dining hall, it was not uncommon for families at nearby tables to quietly leave the room. After the Paralympics, however, rather than distancing themselves, there were even people who offered their seats instead⁴⁴⁾. This can be considered a change in the general attitude of society toward “people with disabilities” as a result of the Paralympics.

Also worthy of mention is the potential impact from watching the agile movements

of athletes in the Paralympic Games, which may act as a catalyst in changing the way people without disabilities view themselves. In other words, as they witness the energetic participation in sports of athletes with disabilities who have overcome enormous difficulties, people without disabilities become aware of their own daily habits of grumbling and grieving over trifling matters, making them feel “ashamed⁴⁵⁾.” This can become a stimulus for self-reflection and self-improvement for spectators.

All of these changes, that is, changes in the viewpoint on disabilities, the viewpoint on people with disabilities, and people without disabilities' views of themselves, are related in a sense to changes in the way people regard the human body. In other words, in most modern sports including the Olympics only healthy bodies endowed with physical and dynamic beauty are admired, and certain values concerning how the body should be have become universal. However, as athletes play an active part in the Paralympics, a broad, large-scale sports event for disability sports, athletes with disabilities are widely exposed to the eyes of the world. It can be said that this exposure may encourage reflection on the view of beauty and physical attributes of the human body⁴⁶⁾. People with disabilities may themselves experience such a change in values in the process of engaging in sports activities⁴⁷⁾, and the change may ultimately influence spectators and society in general through these sports.

Moreover, with the exception of people with hearing impairments, the Paralympics provide an opportunity to bring together many kinds of people with disabilities and, in this regard, the role of the games in the mutual acknowledgment and exchange among people with different disabilities should not be underestimated.

On a psychological level, the impact of the games on the improvement and deepening of the awareness and attitude regarding the nature of care for people with disabilities should be mentioned. The volunteers who took part in assisting the Paralympians during the 1964 Tokyo Paralympic Games are said to have gained an awareness of the importance of not only providing careful and helpful assistance but also of delivering care without imposing on the desire of people with disabilities to be independent⁴⁸⁾. This can be considered a psychological legacy.

The Paralympics can also be a golden opportunity for familiarizing and educating students from a young age about issues relating to people with disabilities⁴⁹⁾. At the times of the Sydney and Athens Games, educational programs are said to have been developed, and plans to invite children to games venues were implemented.

However, there are both negative⁵⁰⁾ and positive studies⁵¹⁾ in regard to whether Paralympics-related events and familiarization activities in school education resulted in changing the awareness of students towards people with disabilities. It can be said that the adoption of a timeframe for observation, and the conducting of quantitative verification remain as future issues to be addressed.

At the same time, beyond the impact on the people who participated or volunteered in the event, it should be mentioned that even people who did not directly participate saw the Paralympics as an event that was close to them, and the Paralympics provided an opportunity for having a sense of affinity with disability sports. For example, at the closing ceremony of the 1998 Nagano Paralympic Games, over seven million origami cranes handmade by 350,000 volunteers were displayed as a symbol of peace and friendship. The “participation” of their cranes in the Paralympics made people feel much closer to the Paralympics.

4. Significance in the Promotion of Sports

(1) Impact on the promotion of sports in general

The Paralympics naturally have “promotion” effects including the improvement of the competitive ability of athletes and the popularization of Paralympic sports. However, the most evident effects in terms of infrastructure development in the wake of the Paralympic Games are the establishment of special training centers for bringing up elite athletes. In China, for example, a large, 240,000m² disability sports training center was established⁵²⁾ in the lead up to the 2008 Beijing Paralympics.

Furthermore, the generation of so-called spin-off effects by linking the Paralympics to various competitive disability sports events may also be considered a unique outcome of the Paralympics. One disability sports event in Japan can be cited as an example. After the 1964 Tokyo Games, a national sports meet for people with physical disabilities including those with disabilities other than spinal cord disabilities was held for the first time in Japan. This was clearly an effect of the Paralympics.

In addition, the World Games for Disabled Youth can be cited as an example of a global movement. The first World Games for Disabled Youth took place in the United Kingdom in 1986. In 1984, due to complications in the United States, the Paralympic Games were held in Great Britain (at Stoke Mandeville) and this served as an

opportunity for holding this event⁵³⁾.

It cannot be said that there has been sufficient quantitative verification regarding whether international events including the Paralympics have contributed directly to the promotion of sports activities for people with disabilities in general. Even where sports events for people without disabilities such as the Olympics are concerned, there is empirical research that casts doubt on the “penetration effects⁵⁴⁾.” However, if, even in a country like the United Kingdom, which is generally perceived to have a significantly high participation rate in sports activities, the participation rate of people with disabilities remains extremely low (according to a research done prior to the London Games, 53% of children with disabilities received less than one hour of physical education lessons per week⁵⁵⁾), it can be expected that the impact of the Paralympics on the participation rate of sports for people with disabilities is relatively high. In fact, while the number of members of sports groups for people with disabilities under the umbrella of the Nagano Adapted Sports Association was a little over 200 in 1997, one year prior to holding the Paralympics, it increased to over 300 in 1998, and over 400 in 1999⁵⁶⁾.

At the same time, the holding of the Paralympic Games and various other international events in tandem provided opportunities for improving competitive conditions each sport (for example, the introduction of functional class divisions) and the clarification and dissemination of information regarding rules. For example, up until the Barcelona Games in 1992, universal rule books existed for only two of the Paralympic sports internationally. It was at this time that universal rule books were compiled for all sports⁵⁷⁾.

It can also be said that the Paralympics provided opportunities for engaging in sports that had not previously enjoyed widespread popularity. At the Seoul Paralympic Games, the number of sports rose from 5 to 18⁵⁸⁾.

Moreover, there are people with disabilities who became involved in competitive sports after watching the Nagano Paralympic Games as spectators. Among these are Keiichi Sato who competed in biathlon events and Shinji Inoue who competed in Alpine skiing, both in the Vancouver Games. Their involvement in sports demonstrates that the Paralympic Games can provide motivation to people with disabilities to become athletes.

(2) Impact on athletes

Factors such as improvement in competitive ability and the deepening of a global perspective can be cited as general impacts of global sports events on athletes. These effects and impacts have also been important in the Paralympics to date. In terms of impacts unique to the Paralympics, which differ from mainstream world championships (differences for example in the events athletes participate in and their nationalities), the bringing together of athletes who have different types of disabilities can be cited. Being together with people who have different disabilities from one's own, watching how they participate in sports competitions at the same location, and engaging in mutual exchanges can be considered meaningful in promoting deeper understanding among people with disabilities regarding other people with different disabilities⁵⁹.

From this viewpoint, the opening and closing ceremonies of the Paralympics have more meaning than the ceremonies of the Olympics. Because of this, there was strong criticism about the schedule for the closing ceremony of the Sydney Games. Due to demonstration events, the closing ceremony took place after the majority of the Paralympians had left Sydney⁶⁰.

(3) Impact on spectators

Due to its unique atmosphere and tradition, unlike regular sports events, a certain sense of unity often develops between spectators and athletes at the Olympic and Paralympic Games. While the welcoming mood of the host nation may also play an integral part, the development of a sense of unity can have a greater significance in an event of disability sports.

The fact that the report on the 1964 Tokyo Games cited the development of a sense of unity between athletes and spectators as one of the characteristics of the Tokyo Paralympics is of particular note. This sense of unity could develop further in tandem with growing social awareness of the need for an environment where people with and without disabilities can enjoy the same sports. In fact, one member of the prefectural assembly in Nagano who watched the Nagano Paralympic Games publicly made a statement to that effect⁶¹.

5. Cultural Significance

The cultural significance of the Paralympics can be considered from the following perspectives: (1) the Paralympic Games as a significant international event and its use as an opportunity to introduce and promote various forms of art and performing arts, (2) the Paralympics as an inspiration for creating works of art, (3) the promotion of the social participation of people with disabilities through cultural activities and works of art by people with disabilities, as well as promoting the marketing and commercialization of their works of art, (4) changing the viewers' perspective in the way they view art through the works and performances of people with disabilities.

(1) Significance as a place for introducing and promoting various forms of art and performing arts

The Paralympic Games as an international event, including the production of the opening and closing ceremonies, can play a role in introducing performing arts of the host country or host region to spectators and visitors as well as in preserving and promoting local performing arts in the process. The Nagano Paralympic Games is a good case in point. The Fire Festival of the Travelers' Guardian Deity, *Dososhin Himatsuri*, in Nozawa Onsen Village was chosen as the theme for the entry of the Olympic torch and the lighting ceremony. This traditional festival is designated as an important intangible cultural asset by the national government, and presenting this cultural asset as well as introducing local folk art are said to have contributed to their subsequent preservation and promotion⁶²⁾.

Furthermore, the ritual music and dancing of *oodengaku*, which formed the basis for the closing ceremony feature a performance with a modern arrangement of *dengaku* (ritual music and dancing) and Shinto rituals preserved in various regions. This also served to promote traditional folk performing arts⁶³⁾.

(2) Inspiration for works of art

The Paralympic Games itself can be considered a source of artistic inspiration (or an indirect catalyst) for media such as posters, photographs, movies, and literary

works. “Song for a Wheelchair (*Kurumaisu no Uta*)”, a novel by Tsutomu Minakami, written after viewing competitive events at the 1964 Tokyo Paralympic Games, may be cited as an example of such inspiration⁶⁴. The novel relates the feelings of the parents of a girl who is confined to life in a wheelchair due to a disability, and describes their state of mind up until they resolve to help her become independent and capable of walking without a wheelchair. The novel was watching the athletes take an active part in the Paralympics that inspired the parents. The content of the story can be considered a product of the Paralympics.

Furthermore, in the town of Yamanouchi, which was one of the venues for events during the Nagano Paralympic Games, a wooden sculpture of the Paralympic symbol was created as a means of helping people with visual impairments understand the symbol⁶⁵. This may be also described as a work of art inspired by the Paralympics.

(3) Catalyst for social participation and empowerment of people with disabilities

For creators and performers with disabilities to have their works of art or performing arts introduced at an event such as the Paralympic Games, which attracts worldwide attention, provides encouragement and in a manner promotes the participation of people with disabilities in social activities. In this regard, the Paralympic Games may also be regarded as serving in the capacity of a celebration of disability sports. From the perspective of people with disabilities, artistic pursuits, as with sports, afford opportunities to demonstrate the abilities they have or their potential abilities. Therefore, it perhaps can be said that a venue like this is even more important for people with disabilities as a place for self-expression than for people without disabilities. Providing such a venue was in fact one of the main objectives of the Art Paralympics Nagano 1998, a festival featuring art created by people with disabilities, which was held during the Nagano Paralympic Games⁶⁶.

At the same time, there is a possibility that the presentation of works of art or artistic performances at the Paralympics will provide opportunities for commercialization and marketing. To some extent, this aspect may not be unlike opportunities that lead to athletes becoming professional.

Furthermore, promoting artistic activities for people with disabilities through the Paralympics provides an opportunity to change the social environment of artistic works by people with disabilities. To again cite the Nagano Paralympic Games as an

example, it provided an opportunity to broaden the scope of the display of works of art by people with disabilities from welfare facilities to museums and store windows⁶⁷⁾. Moreover, the Art Paralympics Nagano 1998 not only became the catalyst⁶⁸⁾ for encouraging cultural institutions like the Nagano Prefectural Shinano Art Museum to become barrier-free venues but also provided an opportunity for more people including curators to cultivate an interest and understanding of art works by people with disabilities⁶⁹⁾.

(4) Changing the viewers' perspectives

Unlike an isolated performance or exhibition, the artistic events and exhibitions held before and after the Paralympic Games can accommodate an extremely large number of viewers and audience. Such an opportunity is extremely rare, particularly for art by people with disabilities. Therefore, the impact its significant scale will have on viewers cannot be ignored. It is particularly important that the art of people with disabilities is having impacts on challenging the existing concept of arts.

For example, one of the works that received a bronze medal in the exhibition of works open to the general public at the Art Paralympics Nagano 1998 was a piece of pottery with a ceramic ball inside, which, when touched, made a sound. Created by a person with a visual impairment, the work demonstrated that the appreciation of pottery, which ordinarily relies on vision, can also be appreciated through the senses of touch and hearing. It can be said that works of art like this can be expected to change the way viewers perceive and appreciate works of art, and even to challenge their views of existing artistic concepts⁷⁰⁾.

The notion of challenging existing concepts applies not only to changing the viewpoint of appreciation. Whether it is sports or artistic activities, praising the suffering and difficulties generally associated with the social activities of people with disabilities itself (as embodied in the spirit of *ganbare*, which essentially means "Overcome all odds by doing your best!") can be questioned.

The Art Paralympics Nagano 1998 challenged the view that the Paralympics are a condensation of this spirit of *ganbare* even more than the Olympics, as well as the tendency for the Paralympics be praised in that light. It is interesting to note that a work of calligraphy containing the one word, "*Ganbaranai*" ("I will not do my best to overcome all odds") drew widespread attention in the media. This statement may in

fact have been challenging the very ideals of the Paralympics as a sports event.

Footnotes

- 1) Brittain, Ian. 2010. *The Paralympic Games Explained.*, Routledge, p.7 and elsewhere.
- 2) Howe, David. 2008. *The cultural politics of the Paralympic movement: Through an anthropological lens.* Routledge, p.18.
- 3) Brittain, Ian. 2011 *From Stoke Mandeville to Sochi.* Common Ground, pp.43-44.
- 4) Ogoura, Kazuo. "The Legacy of the 1964 Tokyo Paralympics." *Journal of the Nippon Foundation Paralympic Research Group* Vol. 01, 2015, pp.5-23.
- 5) Legg, David and Gilbert, Keith eds. 2011 *Paralympic Legacies.* Common Ground, p.167.
- 6) According to the BBC News Magazine, July 4, 2012 issue, as of that time, there were at least five veterans who had been injured in the Iraq or Afghan Wars among those who were selected for the UK team. In addition, there were two who were injured while defusing a bomb during their military service. Athletes like these veterans are said to account for about 2% of all UK team members. Furthermore, according to the same source, the number of British soldiers who sustained injuries to all four limbs or part of the body in the Iraq or Afghan Wars during the period from October 17, 2001 to March 31, 2012 is said to be as many as 262.
- 7) Based on interviews conducted by the author with relevant people who are knowledgeable about PR issues concerning the Paralympics.
- 8) For an example discussing this point from the perspective of a journalist, there is an article by Moore, a reporter of the *Daily Telegraph* (Great Britain) dated October 9, 2009.
- 9) Legg and Gilbert. *op. cit.*, p.114.
- 10) Mainichi Shimbun, August 30, 2012, Evening Edition.
- 11) See Legg and Gilbert, *op. cit.*, p.169, and Brittain, *op. cit.*, p.92.
- 12) Chun, Hea-Ja. 2015. "The Positive Impact and Legacy of the 1988 Seoul Paralympics on Sports for People with Disabilities." *Journal of the Nippon Foundation Paralympic Research Group*, Vol. 02, pp.41-58.
- 13) IPC website as of 2009.
- 14) Ogoura. *op. cit.*, pp.5-23.
- 15) Ogoura, Kazuo. "The legacy of the 1998 Winter Paralympics in Nagano." *Journal of the Nippon Foundation Paralympic Research Group*, Vol. 03, 2015, pp.1-32.
- 16) Legg, David et al. 2004. "Historical Overview of the Paralympics, Special Olympics and Deaflympics." *Paraestra* 20 (1), pp.30-36.
- 17) Howe. *op. cit.*, p.25.
- 18) Chun. *op. cit.*, pp.41-58
- 19) Legg and Gilbert. *op. cit.*, pp.70-71.
- 20) Ogoura. *op. cit.*, pp.1-32.
- 21) Conference for Sports for All 1973.
- 22) For details of statistics published by Nagano Prefecture, see the author's article "The legacy of the 1998 Winter Paralympics in Nagano." *Journal of the Nippon Foundation Paralympic Research Group*, Vol. 03, pp.1-32. Note that the "coefficient" discussed here was calculated by

the author based on statistics published by Nagano Prefecture.

- 23) Nagano Research Institute for Local Government, *White Paper on the Nagano Winter Olympics*, 2000, p.123.
- 24) *Nagano Prefectural Assembly Plenary Session Minutes* March 18, 1998, Vol. 03.
- 25) Legg and Gilbert. *op. cit.*, p.224.
- 26) *Asahi Shimbun*, September 18, 2008.
- 27) *Asahi Shimbun*, March 10, 1998.
- 28) Japan Paralympic Committee, *official report on the Vancouver 2010 Paralympic Games*, p.46, p.49.
- 29) Japan Paralympic Committee, *official report on the Sochi 2014 Paralympic Winter Games*, pp.22-23.
- 30) *Asahi Shimbun*, March 5, 1998.
- 31) For details regarding this point, see, for example, Howe. *op. cit.*, pp.125-26, and details regarding the development of technology in various fields, see Gilbert, Keith and Schantz, Otto. 2008 *The Paralympic Games*, Meyer & Meyer, pp.119-120.
- 32) Darcy, Simon and Cashman, Richard, eds. 2008. *Benchmark Games: The Sydney 2000 Paralympic Games*. Petersham. Chapter 12, "Legacies," p.69.
- 33) Gilbert and Schantz. *op. cit.*, p.80.
- 34) Legg and Gilbert. *op. cit.*, p.223.
- 35) *Ibid.*, p.67.
- 36) Bailey, Steve. 2008 *Athlete First: A history of the Paralympic movement*, John Wiley & Sons, p.28.
- 37) Gold, J. & Gold eds. M. *Olympic Cities*, p.12. *IPC Annual Report 2004*, p.6.
- 38) Hughes, Anthony. 1999. "The Paralympics." Cashman, Richard, and Anthony Hughes, eds. *Staging the Olympics: the event and its impact*. University of New South Wales, pp.170-182.
- 39) Ogoura. *op. cit.*, pp.1-32.
- 40) Howe. *op. cit.*, p.130.
- 41) Chun, *op. cit.*, p.43. Note that numerical figures are based on Legg and Gilbert, *op. cit.*, p.50, but the author believes these figures are based on hearsay and are lacking in supporting documentation.
- 42) The terms "internal" and "external" are also used in Howe, *op. cit.*, p.80.
- 43) Legg and Gilbert. *op. cit.*, p.59.
- 44) *Shinano Mainichi Shimbun*, March 13, 2008.
- 45) Gilbert and Schantz. *op. cit.*, p.148.
- 46) For example, an article by Clare Balding in the *Observer* (British newspaper), October 15, 2004, discusses experience and views in regard to changes in values in this context.
- 47) Howe discusses this point in detail in *The cultural politics of the Paralympic movement: Through an anthropological lens*, 2008, p.130
- 48) Kasai, Y. *Hosts to the Games to Tokyo.*, The International Stoke Mandeville Games for the Paralysed in Tokyo.
- 49) Gilbert and Schantz. *op. cit.*, p.60.
- 50) Willhite, B., Mushett, C. A., Goldenberg, L., & Trader, B. R. 1997. Promoting inclusive sport and leisure participation: Evaluation of the Paralympic day in the schools model. *Adapted physical activity quarterly*, 14 (2), pp.131-146.
- 51) Darcy, S. "Paralympic planning." Cashman, R. and Darcy, S. *The Sydney 2000 Paralympic*

- Games, Sydney*: Walla Walla Press /Australian Centre for Olympic Studies, University of Technology, pp.74-98.
- 52) For details on scale and budget, see "China's Paralympics get a good head start," *China Daily*, May 23, 2008.
 - 53) Bailey. *op. cit.*, p.77.
 - 54) Hogan, K. &Norton, K. 2000. "The Price of Olympic Gold" *Journal of Science and Medicine in Sport* 3, pp.203-218.
 - 55) Legg and Gilbert. *op. cit.*, p.193.
 - 56) *Active Japan*, Vol.12, p.46.
 - 57) Legg and Gilbert. *op. cit.*, p.60.
 - 58) *Ibid.*, p.48.
 - 59) *Ibid.*, p.58.
 - 60) *Ibid.*, p.66.
 - 61) *Nagano Prefectural Assembly Plenary Session Minutes* March 17, 1998, Vol. 02
 - 62) Nagano 1998 Paralympic Games Organizing Committee, ed. *Official Report on the Nagano 1998 Paralympic Games*, p.139.
 - 63) *Ibid.*, p.142.
 - 64) Minakami, Tsutomu. *Kurumaisu no Uta (Song for a Wheelchair)*, Chuokoron-Sha, Inc. 1973.
 - 65) Yamanouchi Town, Shimotakai-gun, Nagano Prefecture. *Record Notes of Yamanouchi Town Regarding the Nagano Olympics and Paralympics*, pp.213-214.
 - 66) Executive Committee for Nagano Art Paralympics. *Collection of Selected Works of Art of the 98 Art Paralympics Nagano*, p.2.
 - 67) *Ibid.*, p.27.
 - 68) *Ibid.*
 - 69) *Shinano Mainichi Shimbun*, December 11, 1998.
 - 70) Executive Committee for Nagano Art Paralympics. *op. cit.*, p.26.